

# 2025 年度埼玉親善大使活動レポート

報告者：高木佳祐

留学先：大韓民国・ソウル大学行政大学院

私は、2023 年 3 月からソウル大学行政大学院の博士後期課程に留学しており、留學生活も 3 年が過ぎました。本レポートでは、留学先である韓国の紹介と、私の研究活動、そして埼玉親善大使としての活動についてご紹介させていただきます。

## 1. 韓国の現状：韓国社会の現在と日韓新時代

2025 年は、日本と韓国が国交を正常化してから 60 周年という歴史的な節目の年でした。ソウルや東京では記念行事が相次いで開催され、観光客の往来も過去最高水準を記録するなど、両国の交流はかつてないほどに深まっています。しかし、その華やかな交流の裏側で、現在の韓国社会は、さまざまな課題にも直面しています。



漢江の景色



市内（光化門）の夜の様子

まず、深刻な「人口危機」の問題です。韓国では、ソウルを中心とした首都圏一極集中が加速し、地方から若者が流出することによる「地方消滅」の危機が叫ばれています。かつて活気に満ちていた地方の商店街が静まり返る光景は、日本の過疎地域が抱える悩みとも重なる部分があります。加えて、激しい競争社会や教育コストの高騰、価値観の変化などを背景に、若い世代の間では結婚や出産に慎重な傾向も見られます。合計特殊出生率は OECD 加盟国の中で唯一 1 を下回り、世界最低水準を記録しています。

また、国際情勢の影響も韓国社会に大きな影を落としています。韓国は現在も北朝鮮と休戦状態にあり、安全保障をめぐる緊張が続いています。さらに、ウクライナ情勢や中東情勢、米中対立など世界的な不安定要因は、資源の少ない韓国の経済にも少なからず影響を与えています。この不安定な時代において、韓国政府も国民も極めて敏感になっており、政府は難しい外交の舵取りが求められています。

一方で、こうした課題の多くは、日本社会とも共通しています。日韓国交 60 周年を迎えた今、私たちは韓国を単なる「エンタメの国」や「歴史問題の相手」としてだけでなく、「共通する社会課題に向き合う協力者」として見つめ直す時期に来ているのではないのでしょうか。実際に、こうした認識は少しずつ広がっており、官民間問わず、さまざまな分野で日韓協力の動きが見られます。

さまざまな互いの文化を楽しみつつ、共通の未来をどのように築いていくか。今の日韓に必要なのは、単なる親善にとどまらない一歩踏み込んだ協力の形です。単なる親善交流を超えた「問題解決志向型」の日韓関係が、これからの 60 年を支える日韓新時代の基盤となっていくものと考えられます。

## 2. 留学（研究）活動

韓国で博士号を取得するためには、博士論文以外にも、一定数の学術論文を発表しなければなりません。現在、私は論文を執筆しつつ、その質を高めるために試行錯誤を行っている状況です。その一環として、国内外の学会やワークショップに積極的に参加しています。ソウル行政学会は、2025 年 6 月に夏季学術大会を東京で開催しました。私は発表者兼学会組織の国際協力委員として参加し、日本側との窓口の役割を担いました。また、本年 3 月にアメリカで開催された ASPA（アメリカ行政学会）への参加は、世界の最先端の知見に触れ、自分の研究を見つめ直す貴重な機会となりました。



ソウル行政学会での発表



ASPA でのポスター発表

こうした海外の学会に参加して驚かされるのは、韓国人参加者の多さです。超学歴社会である韓国では、大卒資格だけでは差別化が難しく、修士・博士課程への進学は決して珍しいことではありません。また、激しい競争の中で研究実績を積むために、海外の学会にも積極的に参加していくことが、学生にも教授にも求められています。

一方で、私の分野に関する海外の学会で見かける日本人研究者は、残念ながら少数派であるのが現状です。その背景には、意欲の問題だけでなく、研究者が直面する切実な資金難があります。韓国では研究者に対する資金面での支援が、大学内外において非常に充実してい

ます。私は幸いにも埼玉県の奨学制度の支援をいただいていますので、そのおかげで資金面での不安なく研究や学術活動に没頭することができています。

海外で活動を広げるほど、こうした埼玉県の支援制度のありがたみを身に染みて感じると同時に、得られた知見を埼玉県の皆様、そして日本社会へとしっかりと還元していくことへの責任を痛感しています。

その責任を果たす一歩として、2025年度は研究者として日本のメディアの取材などにも積極的に応じ、研究を通じて見えてきた韓国の現状や日韓関係への提言を広く発信することにも努めました。これからも、研究と発信の両輪で、日韓の未来を繋ぐ一助となれるよう歩みを進めていきたいと考えています。

### 3. 埼玉親善大使としての活動

韓国での留學生活が深まるにつれ、学会だけでなく、さまざまなレセプションや交流の場に参加する機会も増えてきました。そのような場に臨む際、私は必ず埼玉県章のバッジを胸に着用するようにしています。レセプションではこのバッジが会話のきっかけになることも多く、自然な流れで埼玉県の魅力や親善大使制度のことを伝えることができました。

また、私は以前から名刺にも「埼玉親善大使」の肩書を記していますが、そのおかげで今では周囲に「埼玉からきた留学生」とのイメージが定着してきました。私の手の届く範囲ではありますが、少しずつ埼玉という地名が現地の方々の心に刻まれていることを実感し、大きな喜びを感じています。

一方で、個人としての埼玉県の広報活動には限界があることも感じつつあります。埼玉県へのさらなる恩返しとして、残りの留學期間では、韓国で活躍される埼玉出身の方々と連帯し、一緒に何かできないかと思案しております。現在、有志の方々と、少しずつ話を進めているところです。

### 4. まとめ

私の大学院生活も、後半戦を迎えました。振り返れば、長い留學生活の中では体調を崩したり、予期せぬトラブルに直面したりと、決して平坦な道のりではありませんでした。それでも、それらを乗り越えてこられたのは、多くの知人が支えてくれたことに加え、財政面での確かな安心感があったからです。もし埼玉県の奨学金がなければ、日々の生活を送るだけでも精一杯だったかもしれません。このご支援には、言葉では言い尽くせないほどの感謝の念を抱いています。

この感謝の気持ちを単なる思いに留めるのではなく、研究結果という形で世に出していくことが、研究者である私の責務です。残りの留學生活も、埼玉親善大使としての自覚を胸に、悔いの残らないよう全力で邁進してまいります。